

2024年3月5日（火）八代会場

公述内容（メモ起こし）

磯田 毅

過去最大の流水型ダム、未開な部分もあり。地元住民からこれで環境が守れるのか懸念の声が多く寄せられている。

環境影響アセスについて。参考として今年1月15日からスタートした立野ダムの試験湛水について。開始から20日目の先月満水となり、2/5から3日間で放水。白川流域でどう影響を起さるのか。この事業はアセス法以前の事業だが、法と同等の川辺川ダムアセスに参考となる。先行となる立野ダムは、満水まで20日間、通常水位に戻るまで5日間。先日現場を訪ねたが、工事が続いていたので本体に近づけず。植物などにどう影響を与えた。国交省のよすについて注意深く見る必要あり。現在も白川では濁りが続いている印象で、長期に渡る観測が必要。特に下流への影響が大きいシルトなど細かい砂は、湛水機関の長さによって大きく異なると思われる。海にも影響をする。

一方、立野ダムの3倍の福井県足羽川ダムも湛水に6-7ヶ月かかるとされている。足羽川ダムの4倍、立野ダムの13倍以上もある巨大な川辺川ダムではどうか。簡単な試算だが、ダム本体の通常流量が毎秒20リットルとしたら、満水まで約75日かかることになる。放流日数も加えると相当な日数がかかる。濁水の発生などを考えると、半年かそれ以上かかると予想される。日数がかかればかかるほど、自然の不確定要因が増え、試験ははるかに複雑になる。この間、大雨による濁水や流木の大量発生、流れ込み、一時的な放流も予想され、実施時期を含めると予測は極めて難しくなる。試験湛水の日数は慎重で幅広い角度からの検討が必要。

一方、有明海や不知火海へ供給される土砂に粘土やシルトなど流れにくいものが含まれると、その結果プランクトンなどに悪影響を与えるのではないかと。これらが不漁の原因ではないかと指摘する声がある。不知火海の再生にもこのような視点が重要になってくるのではないかと思う。

50年以上そこに存在し続けるコンクリートのダムは、雨水が山から川を伝い、海につながる自然のサイクルを考慮すべきで、検討する対象範囲をより広くすべき。より慎重で科学的分析が必要。試験湛水は湛水域の斜面が崩落する土砂や、上流の濁水で堆積土砂は必ず起きる。濁りの発生はアセスでも触れているが、楽観的で、影響は短く小さいとしている。山形の最上小国川ダム、満水まで2ヶ月を要した鳥根県の益田川ダムは濁りの問題が多かったと指摘されている。益田川では、濁りだけでなく魚類への影響も特に大きいと指摘されており、国は適格な情報収集と調査を求めたい。

立野ダムは、満水の1010万 m^3 までかかった期間から計算すると、1日平均50万 m^3 溜まったことになる。放流は3日間なので、330万 m^3 となり、再代表流量を見ると毎秒64 m^3 の

半分程度の 38 m³で流れたことになり、貯水と放流について予想通りという。川辺川ダムは立野ダムの 13 倍で、簡単に予想できるのか。その対応は十分間に合うのか。相当疑問。満水まで数ヶ月以上かかり、下流域の放流や濁水を考えると状況次第では相当な日数できる。最近の気候の変動で激しい気象が増える中、予断を持って行うべきではなく、予測の対象範囲を広げることが重要。

日数が増えれば大雨や予期しない天候の悪化で土砂の流入や流木の発生が高くなり、堆積した土砂がその後の水質に長期間に渡り影響を与えることが考えられ、川辺川の清流が守られるのか、甚だ疑問。貯留型の市房ダムと川辺川の合流点を見れば一目瞭然。流水型なので影響が小さいというが、頻発する豪雨などを資料に反映すれば、ゲートを占める頻度はさらに高くなる。そうなるとアセスが示すように、清流川辺川は守れるのか、将来において流域の自然が持続できるのか、極めて難しく不可能。

この長い湛水期間は動物への影響が大きく、国のアセスの見通しは極めて甘い。クマタカやつづらせ洞の動物に注目されているが、その希少生物も単体で存在しているわけではなく、膨大で複雑な関係性で成り立っている。自然に対する謙虚さと深い恐れが必要。

工事期間について。完成は 2035 年とされ、9 年間の工期が予想されるが、山地を含む流域に影響を与え、特に仮排水路などその下流への影響は大きい。地下トンネルは魚類や生物について、影響をトンネルで解決する、役割を果たすとは到底思えない。

この準備レポートは気候変動と自然への理解がなく、事業の正当性を担保できない。7 月豪雨では、球磨川流域 200 ヶ所で土砂崩れが起き、大きく影響し、支流を氾濫させ、それが被害を拡大させた。山林の再生事業を優先すべきで、緑の流域治水のそれが本丸。昨年の台風は川辺川の 2 箇所の砂防堰堤から長期に濁水が続き、下流の萩原堤防から不知火海にまで影響を与えた。コンクリートでできた巨大な事業で、可能な限り環境影響を減らすという人類の知恵が、果たして自然環境をコントロールできるのか。私たちは正にそのことを問われている。